天下の暴論プラス

花田紀凱

古着処分でいい気分

自らを「思い出に節度がない」と喝破したのは作家の百瀬博教さん（故人）だが、ぼくもどちらかといえばそのクチだ。

物が捨てられない。

本はもちろん家にあふれ返って書棚におさまり切らず、部屋の床に平積み、それでも足りずに倉庫まで借りている。

ま、たいした本はない。雑本の類だが、編集者にとってそれが大事なのだ。

それにぼくの場合、雑誌が好きだから、古い雑誌がたくさんある。好きな雑誌は創刊号からそろっていないとイヤなのだ。

カミさんが、少しは片付けろと時々、文句を言うのだが、「わが家はこれでメシを食ってるのだ」と反撃している。

昨年、読んだ紀田順一郎さんの『蔵書一代』（松籟社）の中にこんなシーンがあった。

「古着deワクチン」で集められ海外に送られた古着を選別している様子（©etsl）

3万冊の蔵書を泣く泣く処分した紀田さん、本を積んだトラックを見送ったら「アスファルトの上にヘナヘナと俯伏せに倒れ込んでしまった」――。

「アナタもこのクチじゃないの」

ま、そうかもしれない。

困るのは、ぼくは本だけでなく、自分の着た洋服も捨てられないのだ。まだ十分、着られるジャケットやシャツが捨てられない。ゴミとして出すに忍びない。

愛着もあるし、もったいないという気持ちも強い。

つい4年前まで、大学に入って初めて買ったコーデュロイのジャケットなんてものまでとってあった。

さすがに、なんとかしなくてはと、ネットで探していたら、とてもいいシステムを発見した。「日本リユースシステム」という会社がやっている「古着deワクチン」。

まず3240円払って専用の薄手の洋服なら100枚ぐらいが入る回収キットを購入する。ヤマト運輸の伝票も入っているので、それで、センターに送る。手間はこれだけ。

回収キット代金のうち5人分のポリオワクチン代を「世界の子どもにワクチンを日本委員会（JCV）」に寄付、ミャンマーやラオス、ブータンなど開発途上国にポリオワクチンを届ける（2018年5月現在合計161万4434人分のワクチンを寄付）。

送った衣料は一度、インドなどへ送られ、そこで男性用、女性用、大人用、子供用など170種の品目に選別、開発途上国に送り、そこで古着として格安で販売する。日本からの衣料は十分着られるものばかり、上質なものが多く現地の人たちにも大好評だという。

もともとはリクルートの通販サービス「eyeco」から生まれたシステムだというが、元編集長、猪狩裕喜子さんの「私たちの〝ひと手間〟が、たくさんの笑顔を生み続けると信じて」という言葉に共感した。

で、早速、申し込んで、回収キット4袋が届いた。この回収キットの紙袋、結構入る。

クローゼットにつるしたままのジャケットやスーツ、半袖の白いシャツなどをどんどん詰め込む。シャツなんか40枚以上あった。

ここ数年、いや10年近く、ぜんぜん着ていなかったのだ。いかにムダなことをしていたかを思い知らされた。

終わって「いやぁ、スッキリしたなぁ」と自画自賛していたら、カミさんが、冷たく「次は本、お願いね」。

紀田順一郎さんではないが、思わずヘナヘナと倒れそうになった。

（月刊『Hanada』編集長）

村松友視（月）　室井滋（火）　花田紀凱（水）　椎名誠（木）　長谷川幸洋（金）　山根一眞（土）

オレンジ世代応援　夕刊フジ

※無断転載・複写不可